タイトル：平成 25（2013）年度　教育セミナー
日時：平成 25 年 9 月 20 日（金）～23 日（月・祝）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究　3 階　マルチメディア会議室（304）

阿久津 侑里（千葉大学大学院人文社会科学研究科）

中東☆イスラーム教育セミナーへの参加のメリットを、次年度以降参加を希望する学生に向けてお伝えしようと思います。私自身の参加の経験を踏まえ、これをもって感想に変えさせていただきたく存じます。

・全く専門外の分野に触れることができる
様々な関心をもつ人々が一つの発表や問題に対して各人のアプローチで迫るときのいい意味での雑多さは、地域研究らしさだと思いました。「学際的」といえるのかもしれません。学部では地域研究分野に所属し、現在大学院では史学を専攻する私にとって、久々に感じられる雰囲気でした。自分の関心について思いをめぐらせていると、ついこり固まって視野が狭くなってしまいがちですが、周辺領域への目配りは常に忘れてはならないということを、改めて意識するきっかけにもなりました。

・他大学の先生方や学生たちとの触れ合うことができる
自分の大学内に閉じこもっていては、出会えなかっただろう先生方、学生に会うことができました。懇親会などを中心にたくさんお話をし、それを通じて皆様の関心や問題意識を知ることは、自分自身のためにもなる発見に満ちていたと思います。発表や講義を通じて得るものがたくさんあることは言うまでもありません。これに加え、雑談の中で各々の学生の研究に関する相談会が開かれている様子を何度も目にしました。私自身も、相談を通じて今後の研究への展望が開かれたように思います。

・外部の研究会への参加に慣れるきっかけになる
これまで外部での研究会等にあまり参加してこなかった学生にとっては、それに慣れる良いきっかけになるのではないかと思います。講義のご担当や司会を務めてくださる先生方もいらっしゃいますが、主な参加者は学生ですし、雰囲気は重く堅苦しいものではありません。しかし制限時間の定められた発表と質疑応答の場には緊張感もあり、普段のゼミや演習とは異なる気分で臨むことができました。本セミナーへの参加をきっかけに、今後とも学外での研究会への積極的に参加し、様々な場で教養を深めていきたいと思っております。

最後に、講師や司会等を務めてくださった先生方、参加した全ての学生、事務局の千葉様をはじめ今回のセミナーの運営にかかわってくださった全ての方に深くお礼を申し上げるとともに、中東☆イスラーム教育セミナーのますますのご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

荒木 亮（首都大学東京大学院人文科学研究科）

わたしは今回はじめて中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂いた。先生方による6つの講義、および3人の受講生による発表から、当該分野に関する合計9つの視座をお教え頂いたように思う。加えて、わたし含め関東の大学院生が多かったものの、関西の大学からも数人参加されており、中東地域ないしはイスラーム研究に関心を有する同世代の学生と幅広く交流する機会を得たことは大変貴重な機会であった。

残念ながらわたしは発表させて頂くことはなかったが、各セッション（講義や発表）に充分に設けられた質疑応答の時間では、多様な視点から検討が加えられる内容であり、おのずと自分の関心に惹きつけて議論に参加することができた。とりわけ、受講生発表に対する司会者をはじめとした先生方によるまとめのコメントは、発表者の関心や視座、事例に沿いつつ過不足を補う非常に建設的な内容であり、自らの研究にとって大変参考になった。機会があれば、自分も発表させて頂きたいと強く思った。

個人的に印象に残った議論を以下に記しておきたい。まずセミナーでは、緊迫する中東情勢についてお教え頂いた。「アラブの春」とSNSなど現代メディアとの関係性を再考する保坂先生（日本エネルギー経済研究所）の講義、また新生リビア政権が抱えるガバナンス構築という視座から検討する小林氏（慶應義塾大学院生）の発表、および黒木先生（東京外国語大学）による解説は、東南アジアを対象としてきたわたしのイスラームに対する考え方を相対化してくれたように思う。また村上先生（アジア経済研究所）によるトルコの慣習（ナームス概念）とイスラーム的価値観とが錯綜した事例から文化と女性の人権との関係性を論じた講義、およびフランスのストラスブールという特別な地域を事例に政教分離政策とイスラームの受容との狭間に生きる人々の析出を試みた佐藤氏（お茶の水女子大学院生）の発表から、地域ごとに差異はあるもののわたしが対象とするインドネシアに於いても部分的に通じること、すなわちおおまかに言えば近現代の世俗化と土着の慣習やイスラーム的枠組みとのマッチングの問題が重要なテーマであることを再認識する機会となった。

講義下さった先生はもちろん、担当スタッフとしてご指導下さった諸先生方、また参加者の方々には、セミナーを通じて様々な多くのアドバイスやご示唆を頂いた。末筆ながら、事務局の千葉淑子様をはじめ運営下さる先生方、および一緒に受講させて頂いたみなさまに深く感謝申し上げます。最後に、なにより連夜先生方が開いて下さった食事会は、先生および参加者の方々との距離感を急速に縮めて下さる機会であった。たった4日間ではあったが大変濃い時間を過ごさせて頂いたと感じる背景に「夜の部」の存在が大きかったこと、お時間を割いて下さった先生方に改めて深く御礼申し上げます。

井堂 有子（東京大学大学院総合文化研究科）

9 月 20 日から 4 日間に亘って実施された「中東☆イスラーム教育セミナー」に参加させて頂いた。今年で 9 年目という本セミナーをこれまで継続されてこられた先生方と事務局の方々のご尽力にまず深く敬意を表し、今回貴重な機会を与えて下さったことに篤くお礼を申し上げたい。

講師の先生方の講義内容は、中東メディア論、イスラーム法とイラン、イスラームとグローバリゼーションズ、トルコの都市貧困女性と名誉研究、中世エジプト社会史、イスラーム建築と多岐に亘り、研究手法も様々であったが、各内容の奥ぶかさはいうまでもなく、教育的観点を意識されてか、それぞれの研究者としての様々な経緯や試みを踏まえたお話も印象的であった。さらに参加者から UAE の高等教育やリビアのガバナンス、フランスのイスラーム受容について現代の「生きた」題材を考察した発表があった。他の参加者からの様々な視点での質問やコメントも活気があり、折に触れた AA 研の先生方からのコメントやフォローにより全体の議論のバランスが確保されていた。参加者はこの点からも学ぶことができたと思われる。

「中東」と「イスラーム」以外は分野横断的というチャレンジングな本セミナーは、今回の参加者の中で最年長の参加者であった筆者にも大いに示唆を与えてくれた。12 年前に中東地域研究で修士課程を終え、その後留学と勤務で過ごしたエジプト、オランダ、シリア、スーダンを経て、この4月から博士課程に復学という遠回りをしてきた者にとって、たとえば「イスラーム世界とは何か」という問いが依然問われていることは不思議な感慨を沸き起させるものであった。時代や分野で流行り廃りがあるが、時代の底流を流れて繰り返し問われ続ける問題がありえる。勿論、どのような問いを見出し発するのかは個々人に委ねられているのだが。

この他、4日間を通じ、ディシプリンとフィールド、研究対象と研究者の立ち位置、という永遠のテーマについても考えさせられたが、最も印象的だったのは、「今目の前で起きていることを全てと思わない」（近藤先生）と「ミッション・オリエンティッドな研究」（黒木先生）という二点だろうか。目前の「課題」を時間軸・空間軸において捉え直し、入り組んだ因果関係を解きほぐし解釈していくという作業は特定のディシプリンを超えて「理解する」ために必要な作業である。そしてそもそもなぜそれが「課題」であるのか、その解明はなぜ必要かという点を常に自分に問い続け、さらに他者に理解してもらうために努力する。自らの「無知の知」を原点として、謙虚に粛々と自らのミッションを模索し全うしていきたいと思う。「山がそこにあるから」というピュアな気持ちも忘れずに。

改めて、貴重な機会を与えて下さったセミナー主催の関係者の皆さまに深くお礼申し上げる。
ありがとうございました。

小川 杏子（お茶の水女子大学大学院　地理環境学コース）

「ここに参加している人は、何を求めて来ているの？」
深見先生にこのように問われて、「私は何を求めて来たのだろう…」と改めて考えさせられたのがセミナー3 日目の帰りだったと思う。

今回このセミナーに参加したのは、自身の修論のことや今後のことを考えている中で、新たな環境に身を置き、新たな視点からもう一度考え直したいと漠然と思ったからだった。そのために、同じ中東やイスラームを研究している院生や先生方、また普段の大学院生活では出会わないような方々に会って話しを聴いてみたい、と単純に思ったのが正直なところだ。

今、改めて振り返ってみると、結果としてとても充実して、他のものに代えがたい貴重な日々を過ごすことができた。それは、まず、何よりもセミナーの雰囲気にあったように思う。「研究会」や「学会」とは異なり、発表を聴き自由に発言できる雰囲気がそこにあったからだ。そのような雰囲気の中で受講する中で、もっともっとたくさんのことを「知りたい」「分かりたい」、そしてもっと深い話しをしたいと感じる場面が多くあった。それは、自分の知識のなさの裏返しなのだが、そう思えることが多くある環境の中で、そして修士という今の段階でこの 4 日間を過ごせたことは、今の自分にとって貴重な機会であった。

そしてまた、自身の物事の捉え方の幅を広がり変化したと感じる。今までは、同じ「中東」でも、どこか「トルコ中心」的な物事の捉え方をしていた。今回中東の様々な国をフィールドとして研究をされている人から、それぞれの研究・経験によった視点での話を伺うなかで、自分自身の視野の偏りや狭さ、「そういう捉え方もできるのか」とはっとさせられることが多々あった。

このように、ここで述べられるのはほんの一部である。しかし、1つ1つの報告の中で、そしていろんな場面での会話の中で、絶えず考えさせられ、何かを得ることができた 4 日間は振り返れば振り返るほど、濃い時間だったと感じる。それだけでなく、今回このセミナーで共有できた時間、そして何よりここでできた「つながり」は、とても大切なものである。

最後になりますが、セミナー参加者のみなさん、AA 研の諸先生方、千葉さん、このような場を創っていただき、本当にありがとうございました。

小谷 まい（神戸大学大学院経済学研究科）

私は“中東”も“イスラーム”も専門ではない経済学研究科に所属しています。そのため、中東経済史の研究には、言語の限界、史料の限界、専門知識の限界といった障壁を感じていました。この度の中東☆教育セミナーの受講によって、様々なパースペクティブを持った研究者の皆様やその研究に触れることができたことが、個人的に今後の研究の方向性を考えていく大きなステップとなりましたことを、講師の先生方、参加学生の皆様、スタッフの皆様に、感謝申し上げます。

以下、このセミナーで私の感じたことを個人的な関心からではありますが、二点書いてみます。

・中東の研究、イスラームの研究

中東とイスラームは切っても切り離されない存在ではありますが、イコールの同じ枠組みで捉えられるものでは勿論ありません。中東という地理的な広がりからの研究もあれば、イスラームという宗教・社会的な枠組みからのアプローチもあります。イスラーム成立以前からの中東における伝統、イスラーム成立後にイスラームの枠組みで形成されたもの、イスラームの教義として吸収されたものなど多種多様な関心からの研究が想定されると思います。中東とイスラームの関係を意識することで、実際の現象の考察がより深くなるだろうということを強く感じました。

・イスラームとヨーロッパ

メディアでは対立項として映し出されがちですが、時代や地域によって程度の差はあれども、相互に影響を与え続けていたと思います。グローバリゼーションの考察においても、15 世紀以降の大航海時代、産業革命、世界大戦などヨーロッパが非ヨーロッパに進出していったことで世界が一つになった、というような認識は一面でしかないということを、イスラームを対象にした研究は明らかにしていると思います。

四日間のセミナーで、本の中でしか出会うことのできなかった先生方、研究者の皆様と実際にお話しすることができて、とても刺激的な時間を過ごすことができました。同時に、私はまだまだ研究を始めたばかりで、今後の課題は山積みだということも痛感しています。中東やイスラームに関して、論文や研究書を読む以上のお話が聞ける機会は私にとっては希少で、非常に有意義なセミナーでした。重ね重ねになりますが、本当にありがとうございました。

小幡 あい（東京外国語大学大学院総合国際学研究科）

私は東京外国語大学で学部を終えそのまま同大学院に進学しました。慣れ親しんでいる今の環境に甘えすぎてはいないかという不安と焦りが芽生え、外からの刺激を求めてこのセミナーに参加しました。
特にこのセミナーで痛感したのは、今まで多くの事柄をただ知っている「つもり」で曖昧に解釈してきたこと、そしてその曖昧さの蓄積（思い込み）によっていくつもの重要な点を見落としてきたことです。最終日の講義で、深見先生の「イスラーム建築の定義」という壮大なテーマから導き出されたイスラームの多様性は、自分の認識がいかに視野の狭いものであったのかを自覚させるものでした。まだ自分には語る資格がないと、知らないうちに自ら制限を設けて（言い訳をして）少しずつ視野を狭めていたことの重大さに気づきました。また同時に、「イスラーム」のような大きなテーマとも真剣に向き合える勇気を頂けました。村上先生の講義では、自分の思い込みによって形作られていたナームスの認識に大幅な修正が加えられました。その他にもセミナー中、概念の定義・内容についての議論が頻繁に交わされ、その度に自分の一方的な思い込みによる認識の危うさを痛感し、これからの研究でもその点を心に留めておきたいと思いました。
また、受講生の発表と先生方の講義に対しての質疑応答のラッシュに目を見張りました。考えがまとまらず発言できない歯がゆさは残りましたが、みなさんの専門的観点からの質問の数々は非常に良い刺激になりました。
この4日間で多くの専門的な知識を吸収することができました。ただそれ以上に、受講生や先生方の研究に対する姿勢や取り組み方を学べたことが何よりもの収穫であったように思います。懇親会では、先生方から専門地域での生活感あふれるお話をたくさん伺うことができ、大変嬉しく思いました。昼の会、夜の会を合わせて中東☆イスラームセミナーであるという言葉は確かにその通りだと実感しました。

最後にご指導・ご教授してくださった先生方、運営に携わった事務局の千葉さまとスタッフの皆様に、この場を借りて深くお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

後藤 智明（東京大学大学院人文社会系研究科）

この中東☆イスラーム教育セミナーを自分が受講した結果として、自分が抱いた感想はいくつかあるが、順に述べていきたい。まず、休日開催であることで、平日に用事を有している自分のようなものにも参加しやすく、自分にとっては非常にありがたいものだった。午後始まりであることも、首都圏のこの会場からやや遠い地域に居住している自分としては、余裕をもってこの会場に来ることが出来て、都合の良いものであった。しかしながら、以上のように時間設定は自分のスケジュールにとってはありがたかったのであるが、もしもう少し早い時間からこのセミナーが始まるのであれば、もう少し多くの発表を、受講生の物であれ、講師の物であれ、聞けたのではないかなという感想も抱いた。

また、今回の教育セミナーにおける受講生発表の場は、大学院に在籍中の学生を主たる対象としたレベル設定であると初日に説明されており、多くが学生である受講生にとって、過度な緊張を抱かずに発表ができる場が提供されるので、発表をしたいと願う受講生にとって、非常にありがたいことではないだろうかと自分は感じた。さらに言えば、受講生がそれを通じて、調査結果を人前で発表することへの積極性をつかむ助けとなるかもしれないとも感じた。自分個人は今回、発表はせず、聴講のみという形で参加をしたが、今回発表している受講生の方々を見ながら、また講師の方々からだけでなく、他の受講生の方々からも積極的に発表へのコメントがされているのを見ながら、自分も発表をしてみたかったなという気持ちがわいてきた。

また、今回の教育セミナーでは、講師の方々の発表も、現代のメディア、婚姻関係、イスラーム法、グローバル化とイスラーム、中近世エジプト史、建築、と多分野にわたり、かつ受講生の方々も、言語、政治体制、教育システム、マイノリティー、歴史、等様々な分野を専門として持っていた。これにより、自分は、自分にとって、知らない分野を知る機会を提供された。であるゆえに、自分はこの中東☆イスラーム教育セミナーの持つ、異種交流的な懐の深さにとても良い感じを持った。

最後に、この機会を与えてくださいました東京外国語大学の先生の方々や、外部から来られた先生の方々、事務局の千葉様、そして他の受講生の方々にお礼申し上げます。

後藤 優理子（大阪大学大学院経済学研究科）

他研究科の掲示板を偶然見ていて、このセミナーの存在を知りました。追加募集かつ応募締切まで数日しかないというぎりぎりの状況だったので、受講出来ると知ったときは本当に嬉しく思いました。セミナー参加前、中東とは全く関係のない企業でインターンをしていたのですが、私が中東を研究していると分かると、社員の方々から色々と質問が飛んできて（思いのほか突っ込んだ質問も多かった）驚きつつも嬉しい気持ちが致しました。また、近年味の素や良品計画が当該地域へ進出したと知り、少しずつ日系企業の関心が以前より高まっているのではないかと期待しております。その中で、より複層的な視点を持ってイスラーム、中東地域を考えていきたいという思いでセミナーへ参加致しました。

実際にセミナーへ参加し、様々な分野の研究を知ることができとても充実した4日間を過ごすことができました。想像よりも先生方との距離が近く、昼食をご一緒させていただいた時には興味深いお話をたくさん聞くことが出来ました。個人的には、中東やイスラームを専門外の方向けにもこのようなセミナーがあればより良いと思いました。もっと多くの方々に知られるべきだと感じています。受講を通し、イスラームとは一体なんなのだろうとずっと考えています。今後、現地調査等を通して自分なりの答えを見つけて行きたいと思います。

最後に、このような貴重な機会をくださった先生方、事務局の方々に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。次回は、是非私も自身の研究を発表出来るように頑張りたいと思います。

篁 日向子（東京外国語大学大学院総合国際学研究科）

私はこのセミナーが開かれている東京外国語大学でトルコ語を学び、現在、同大学大学院で現代トルコ文学（主に演劇作品）の研究をしています。私は人や出来事よりも作品と向き合うことが多いのですが、以前より「フィールドワーク」に対して強い関心と憧れを抱いていました。学部生の頃、アジア・アフリカ言語文化研究所が発行している「FIELD＋」という雑誌を手にし、鮮やかな文章と写真に惹かれました。また同じ頃、同研究所が開いた写真展のお手伝いをし、研究者の方々とお話しする機会に恵まれました。このような経験がきっかけで、もっとフィールドワークや地域研究について知りたいと思い、本セミナーを受講させていただきました。

いざセミナーが始まってみると、内容の濃い発表が続き、そのような気楽な態度では太刀打ちできず、質問をして活発な議論に貢献できなかったことを申し訳なく思います。しかし私にとっては、自分の知識の幅を広げることのできる予想以上に刺激的で有益な時間でした。

発表・セミナーの内容は多岐に渡ったにもかかわらず、どなたのお話からも共通して感じられたのは、たとえ自分のフィールドに関してある考え方・物の見方が定着していても、それを徹底的に疑い自分の目で確かめることの大切さ、そして面白さでした。そしてそれゆえに言葉の定義や使い方に対する感覚を鋭く保たなければならないのだと思いました。

今回のセミナーで私にとって特に印象的だったのは、村上薫先生のセミナーで、トルコの「ナームス」（名誉）に関する自分の認識が変わった瞬間でした。これまで私にとって「ナームス」とは、トルコ人らしさやイスラムと切っても切り離せない、しかし捉えどころのない不可解なものでした。しかし村上先生のインタビュー資料を読んで、またナームスの語源はギリシャ語の「ノモス」だという髙松先生の一言で、今「ナームス」を作るのは今生きているトルコ人であり、一人一人定義が違っていて当然であり、時代や状況によって変わりゆくものではないかと気付きました。

私は文学作品の研究をしているわけですし、学部生の頃から大学のプロジェクトである「日本語で読む中東メディア」のスタッフとして新聞記事の翻訳を続けています。言葉は生物であることを忘れず、書き手がどのような姿勢、どのような意図でその言葉を選んだのかということにもっと敏感でありたいと決意を新たにしました。

なお私は、セミナー後の懇親会で研究者の方々がご自身のフィールドの衣食住や生活環境についてざっくばらんなお話をされるのを聞くのが大変楽しく、このような場を設けていただけたことを心から嬉しく思います。またこのセミナーでは一貫して、名札や修了証書を用意して下さるなど細部までご配慮が行き届いていることに何度も驚かされました。

先生方、事務局の方々、貴重な時間を割いていただき誠にありがとうございました。

営に関わって下さった全ての方に、心より御礼を申し上げたい。

三上 哲史（日本大学大学院文学研究科）

私が、中東☆イスラーム教育セミナーを知ったきっかけは、指導教官である粕谷先生からいただいた募集要項でした。自分の所属先には中東・イスラームに関することを専攻している院生は私しかいないため、入学以来マイペースに勉強を進めていたのですが、このままでは井の中の蛙になってしまうのではないだろうかと思い、参加を決めました。

四日間のセミナーは、中東・イスラーム研究の最先端を走る一流の先生方の講義や、受講生の方々のレベルの高い発表、質疑応答、セミナー後の飲み会など、盛りだくさんの内容で大変有意義なものでした。特に、オスマン史の髙松洋一先生に個人的に色々とご指導を賜ることができたのは何よりの収穫でした。さらに、イラン史の近藤信彰先生やオスマン史の藤波伸嘉先生からもご指導賜ることができ、今後の研究の参考になることを沢山吸収することができました。また、人類学や地域研究を専門としている方々の発表や発言は、歴史学を専攻している私にとってはとても新鮮で、大変良い刺激になりました。

しかし、得るものもあった一方で、先生方や受講生の方々の発表・質疑応答を聞いていて、自分の視野の狭さや勉強不足も痛感しました。常日頃、視野を広く持とうと意識はしていても、つい自分の関心あるところにばかりに目が行ってしまう私にとって、他分野の方々との交流は視野を広く持つことの大切さを再確認させてくれました。

この四日間のセミナーからは本当に沢山のことを学ぶことができました。今後は、ここで学んだことをきちんと自分の研究の中に生かしていけるよう努力し、今年はできませんでしたが、来年のセミナーで自分の研究成果について発表できるよう準備していこうと考えています。

最後に、講師の先生方、事務局の千葉淑子様をはじめ今回のセミナーの運営スタッフの方々に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

山下 里香（東京大学大学院人文社会系研究科）

在日パキスタン人の児童の多言語使用の研究を始め、早 6 年。中東ではなく日本のムスリムコミュニティで、宗教ではなく社会言語学の分野である自分にとって、「中東・イスラーム研究」という名前のセミナーは、参加するには恐れ多かった。モスクをフィールドとしているのに「ムハンマドー彼の上に平安あれ」の＜正しい＞発音だってよく習得していないのだ。応募要項には「ヨーロッパのムスリムに関してでもよい」とある上、研究発表をしなくても良い、とハードルもさほど高くなかった。そうして、博士課程ももう復路の 4 年目で、えいやっと応募した。

「中東☆イスラーム研究　教育セミナー」が「中東・イスラーム研究」ではないというユニークさに関しては、誰も質問せずとも、主催側から説明があった。「・」を使用すると、中東地域や古典的なイスラーム研究のみのような印象を与える。それを使用しないことで、中東地域にルーツがあるとされ、現在ますます広がりつつあるイスラーム文化を、どこかで意識している地域の諸分野の研究、という意図を表したそうである（「カワイイから」という声もあったという話であった）。そして、その「☆」の広がりと奥行きは、4 日間の講義と研究発表を通して、十分に感じることとなった。

どの学問分野でも、現象の記述とイーミックな分析だけではなく、理論的な貢献が求められる。その理論の多くは、欧米発のものである。それぞれの地域に関して深く知ることで、何がその理論との関係において見えてくるのか。そうした漠然とした頭の中での問答の4日間を締めくくるかのように、最終日の深見先生のご講義で議論にあがったのが、「ではイスラーム建築とは何なのか」という問いである。西洋が生んだ「イスラーム建築」という概念への批判を乗り越えた「イスラーム建築」に、何が含まれるのか。私も、日本の新設モスクは「イスラーム建築」なのか、という質問をした。「イスラーム」で何をさしうるのか、破棄するとしたら代替できる語とその指し示す範囲は何なのか、その定義の主体となるのは誰なのか。そうした問いが、各自の胸の中に種として蒔かれたと思った。今後その答えがどのように、私自身を含めた各自の今後の研究に現れてくるのか大変楽しみである。これこそが、「中東☆イスラーム研究」の「☆」の、神意だったのかもしれない（と、表現から必要以上の意味を作り上げ、分類し、機能を定義しようと、言語学者が戯れる）。

ご多忙の中、先生方は夜遅くまで私たちにつきあってくださった。それぞれ世界各地のフィールドの話をしてくださり、広く深い知見を得ることができた。飯塚先生は「それぞれの分野で研究や学会発表をしても、その地域を知っている研究者からのコメントがないと、大学院生にとって大きな障害となる」とおっしゃっていたが、まさしくその通りである。幸いイスラーム地域研究にも詳しい指導教授のもとで研究する私も、所属学会ではどうしても「パキスタン、すごいですね、何語が話されているんですか」と聞かれる。錦田さんからは「体力も大事」、苅部さんからは「人と違うことをやれ」と、叱咤激励を受けた。博士論文の執筆等で、セミナー発表はとてもできなかったにも関わらず、大変有意義な 4 日間を過ごせたことに対し、スタッフ、ゲスト、および受講生の皆様の懐の深さに、厚くお礼を申し上げたい。

鎗水 かほり（東京外国語大学大学院総合国際学研究科）

このセミナーへの参加は初めてだったのですが、研究の内容で悩み、暑さで勉強に身が入らなかった私にとって、他の学問分野や地域の話を聞く事は、非常にいい刺激となりました。
特にこのセミナーで一番印象に残ったと同時に、これから研究をする際に留意しなければならないと思ったのは、「イスラーム」という概念の扱い方です。「イスラーム」という概念のみならず、例えばセミナー中に「ガバナンス」や「グローバリゼーション」などの概念の定義や内容に関しての議論も行われ、慎重に言葉を用いなければと痛感したのですが、特にこのセミナーの名前にもある「イスラーム」というものが、非常に広く用いられる単語であるにも関わらず（もしくは広く用いられるからこそ）実際は非常に曖昧性を持つ単語であるのだと実感しました。深見先生のイスラーム建築のお話の際、「何を以て『イスラーム』建築と定義するのか？」という話になりました。「イスラーム建築」とは時代によって区切られるものなのか、ムスリムがいればそれはどの地域のモスクであれイスラーム建築といえるのか、ミフラーブは必ず円形なのか、などの議論を通じて、今まで私が考えていた「イスラーム」という概念が、非常に曖昧かつ先入観のあるものだったのではないか、とイスラームというものについて再考する契機となりました。
またこのことに関連して、受講生の一人の「研究を始めた当初、中東地域に関して論じる際に必ずイスラームを言及しなければならないようなことに抵抗があった」というコメントも非常に印象に残りました。このことは、村上先生のトルコのナームスに関する発表で、そもそもナームス殺人というものはイスラームで定められているものではないこと、また「こうあればナームスがある」という基準に必ずしもイスラームが関わってくるものではないことからも痛感しました。中東地域に住み、イスラームを信仰する人々であっても、彼らの価値観や倫理観を規定するものはイスラームだけではなく、土着の民間信仰や慣習も深く人々の生活に根付いており、イスラーム的な側面ばかり重視していては、見えなくなってしまうものがあるのだと気付くことができました。
この4日間のセミナー中、懇親会などで他の受講生や先生方からお話する機会がたくさんあったのも非常に有意義でした。研究の動機や経緯や研究に対する視点などは、先生方の本や論文を読むだけでは知りえなかったですし、お話をする中でこれからの研究のヒントや指針をいただくことができました。
最後に、ご講義・ご指導をして下さった先生方と事務局の千葉さんに深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

李 旎（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開催された 2013 年度イスラーム教育セミナーは、論文に追われている私にとって、大変勉強になった場であり、非常に有意義なセミナーであったと思います。多分私はこのセミナーの初めての外国人受講生かもしれないです。外国人の私の感想を以下のようにまとめてみました。（日本語まだまだですので、旨く表現出来ないところがあると思います。ご容赦ください）

まずは、私にとって最も印象深くかつ有意義であったのは、中東やイスラームの知識を学ぶということだけでなく、中東やイスラームに関する様々な研究を行っている方々と知り合える場があることがとても大事であると強く感じています。これからも皆様と出会った縁を大切にしていきます。

次は、自分の研究に関する知識を得られて、本当に感謝します。私は国際言語文化研究科に所属していますが、中東やイスラームに関する知識が大変薄いです。自分の論文を書く時も、言語の限界、資料の限界、専門知識の限界等といった文化的な壁をよく感じています。このセミナーのおかげで、普段滅多に聴こえない講義・発表を聴講できて、本当に嬉しかったです。特に床呂先生の「グローバリゼーションズ」の解釈を聴いてずっと困っている用語の定義がわかるようになり、村上先生の「トルコ貧困層女性に対するインタビュー」の内容を聴いてトルコにおける女性の社会的状況を少しわかるようになり、深見先生の「イスラーム建築とは何か」の回答を聴いて、自分が研究しているベリーダンスとも類似かもしれないと感じています。また自分の学問的知識の不足を補うために引き続き勉強する必要があると改めて強く感じています。

最後は受講生の発表では、発表した受講生の勇気に感銘しました。発表者をはじめ活発な質問や議論によって、受講生の積極性、熱意を実感できました。また、プレゼンテーションはレジュメの作り方から発表方法、話し方、ツールの利用などに関して、自分の研究しているパフォーマンスの立場で観察することが出来て、大変参考になりました。

文末になりますが。今回大切な受講機会を与えたくださったセミナーの先生方、事務局の方々、参加した全ての学生に心から感謝いたします。ありがとうございました。皆様とお会い出来て、本当によかったです。